

「さざなみ軍記」論

横山信幸

一

「さざなみ軍記」は、昭和五年から昭和十三年までの九年間にわたって書き続けられた作品である。時代的に言えば、それは満洲事変前夜から二・二六事件、日中戦争を経て昭和十三年の國家總動員法制定に至る昭和初めの暗い時代にあたる。井伏鱒二について言えば、彼にとってこの九年間は、「山椒魚」「炭鉱地帯病院」「朽助のゐる谷間」「屋根の上のサワン」(いずれも昭和四年)等の優れた作品を發表し「七年間の低迷と苦吟から脱出する転機を掴んだ」時期から、『ジョン万次郎漂流記』により第六回直木賞を受賞(昭和十三年)、文壇的にも中堅作家として活躍を始める時期に相当する。それゆえ、この作品は、平家の若き公達の逃亡記録であるとともに、昭和初年という時代の中の作家の成長記録という面をも持っている。

井伏鱒二は、どこからどこへむかって成長したのか。本稿の目的は、作品に即しながら右の点を明らかにするところにある。

二

「さざなみ軍記」について井伏は次のように言う。

……戦乱の渦中にゐるものは、平和な生活をしてゐるものに較べると急速に大人びて来るだらう。(中略)急速に大人びて行く少年は書く文章も急速に大人びて行くだらう。こちらはそれを年月の経過に俟つて追ひかけて行く考へであった。

(『さざなみ軍記』の史料『文学』1953・2)

……自分自身が少しでも経験をつむのを利用して、戦乱で急激に大人びてゆく主人公の姿を出す計画であった。

(『新日本文学全集第十巻・井伏鱒二集』巻末解説 昭和十七年 改造社)
右の言によると、この作品の狙いは主人公の成長過程の描出にあり、その真実

性は作者自身の成長によって保障されるということになる。主人公の少年はどのように変貌したか。又その変貌は作者のどのような成長によってもたらされたか。……主人公は「対決」からの遁走によって「傍観」というおとなの対人態度を身につけて「成長」する。

(「井伏鱒二『さざなみ軍記』論」 東郷克美 『軍記物とその周辺』早稲田大学出版部刊 昭和四四年 『日本文学研究資料叢書 井伏鱒二・深沢七郎』有精堂 昭和五二年所収)

……主人公はますます若鮎のような潑刺とした魅力ある青年に成長し、逆の方向にすくすくと伸びていって、帰農したがらない雰囲気濃厚になってきた。

(「井伏鱒二論」松本鶴雄 冬樹社 昭和五三年刊)

これは主人公の成長についての言であるが、成長とは果たして「傍観」という「対人態度」を身につけることであったのか、あるいは「若鮎のような潑刺とした」青年になることだったのか、あるいはその双方を生きることであったのか。

三

この物語は、途中六年間の執筆中断の時期を境に、前後二つのグループに分けることができる。前半と後半とは物語にどのような変化があるか。松本鶴雄氏は次のように言う。

その第一は『逃亡記』の主調音になっていた没落感、滅亡感が『西海日記』『早春日記』では薄らいでいるということを挙げねばなるまい。

(『同前』)

東郷克美氏は次のように言う。

……後半になると表現には抑制が加えられていっそう的確さをまし、かわりに青春特有のみずみずしい抒情は失なわれる。いわば青春の感受性とひきかえに成熟を手に入れた作者は、同時に少年とともに一種の墮落もしたのでは

なかったか。

(「井伏鱒二『さざなみ軍記』論』「前出」 傍点は東郷
両氏が指摘するような作品前半部と後半部との変化はなぜ生まれたのか。

「さざなみ軍記」は次の順番で発表された。

(一)逃げて行く記録(寿永二年七月十五日～同月二十七日)「文学」昭和五年
三月号

(二)逃亡記(寿永二年八月十九日夜～同月二十日)「作品」昭和五年六月号

(三)逃亡記(寿永二年八月二十日夜～同月二十一日)「作品」昭和五年七月号

(四)逃亡記(寿永二年八月二十一日午後～同月二十二日)「作品」昭和六年八
月号

(五)逃亡記(寿永二年八月十六日～同月十九日)「作品」昭和六年十月号

(六)西海日記(寿永二年九月二十四日～同月二十九日夜)「文芸」昭和十二年
六月号

(七)早春日記(寿永三年正月二十九日～同年二月四日)「文学界」昭和十三年
一月号

(八)早春日記(寿永三年二月五日～同月七日)「文学界」昭和十三年二月号

(九)早春日記(寿永三年二月十九日～同月二十七日)「文学界」昭和十三年三
月号

(十)早春日記(寿永三年三月一日～同月四日)「文学界」昭和十三年四月号
発表年月を見ると、物語は、昭和五年三月から昭和六年十月までに発表された
グループ(一)から(四)まで)と、六年間の中断の後、昭和十二年六月から昭和十三
年四月までに発表されたグループ(六)から(十)まで)とに大別できる。ところが「
逃げて行く記録」(昭和五年三月号)の執筆時期について、東郷克美氏は次のよ
うに述べている。

冒頭部分を執筆したのは一体いつなのだろうか。「自序」(昭和十三年四
月記)のごとく「十二年前」だとすれば大正十五年ということになり、「資
料」の「震災がすんでから、一年か二年たつて」にはば「一致する。「解説」
の「昭和二年頃」とはずれが生じることになるが、ここでは一応、冒頭「
逃げて行く記録」は雑誌発表(昭五・三)より四、五年前の無名時代の執筆
ではなからうかと推定しておく。

(「井伏鱒二『さざなみ軍記』論』「前出」)

また、松本鶴雄氏は次のように言う。

……「さざなみ軍記」が活字になったのは昭和五年であるが、それが書かれ
たのは作者が河盛好蔵との「対談」で言っているように、「最初書こうと思
ったのは同人雑誌をしているときで『文芸都市』へ入る前」であるとするな
らば、昭和三年に「文芸都市」同人になっているのであるから昭和二年頃で
なければならぬ。昭和二年とは同人たちがごとく左傾し、「戦旗」に
参加した結果、井伏一人と残された年でもあるからだ。

(「井伏鱒二論』前出)

もし、「逃げて行く記録」が書かれたのが昭和一、二年頃だとすると、この物
語の前半部はさらに二つの部分に分けることが可能になる。即ち、ほとんど無名
の時代に書かれた「逃げて行く記録」と、「山椒魚」「炭鉱地帯病院」「朽助の
るる谷間」等を著し作家として一歩踏み出した時期に書かれた部分——「逃亡
記」(一)～(四)とである。これに、昭和十二年から昭和十三年に書かれた「西海日
記」「早春日記」を合わせると、物語は全部で三つの部分から成り立っているこ
とになる。そのそれぞれの部分には、主人公および作者の成長の足跡がはっきり
と残されているように思われるのである。

四

「さざなみ軍記」を執筆年代によって三つの部分に分けてみると、次のよう
なる。

第一部(昭和一・二年ごろ)

「逃げて行く記録」(寿永二年七月十五日～同月二十七日)

第二部(昭和五年～六年)

「逃亡記」(寿永二年八月十六日～同月二十二日)

第三部(昭和十二年～十三年)

「西海日記」「早春日記」(寿永二年九月二十四日～寿永三年三月四日)

それぞれの部分における主人公および作者の成長の跡をみてゆきたい。

第一部の特徴として、まず指摘できることは、物語全篇が落ちてゆく者の悲哀
感で充たされているということである。

私達の旅は、その前途が遠いらしい。そして誰もその目的地を知ってゐな
い。夕暮れときになつて、私達の同勢は七千餘騎であるといふことが概算さ
れた。夕方の太陽は、私達の進んで行く正面の方角に沈んだのである。日が

この現代語訳の日記……（壽永二年七月、平家一門の人々が帝都を追はれ遠い他國へ逃げて行くとき、平家某といふ少年の書いた道中記）この前半を私は二回にわたって他の二種の雑誌に発表したことがある。次に示すところのものは、その後半の一部分である。

二回二種の雑誌のうちの一つは、おそらく「逃げて行く記録」（『文学』昭和五年三月号）を指すのであろう。しかし、他の一回は発表雑誌、発表年月、内容ともに不明である。考えられることは、田の八月十六日～同月十九日の部分は昭和五年六月以前にどこかに発表されていたか、あるいは発表されないまでもすでに成稿となっていたか、または井伏の全くの思い違いか、いずれかであろう。現在のところいずれとも決めがたいが、物語の展開から考えて、おそらく八月十九日の梨の木の下での少女との出会いは、八月十九日夜の場面に先立って発表されたと思われる。それは、昭和五年三月発表の「逃げて行く記録」とあまり違わない時期ではなかったか。

鈴木益弘氏は、昭和五年三月発表の「逃げて行く記録」の初稿前書き（現在の筑摩書房全集第一巻に収められているものと異なる）と、昭和六年十月発表の「逃亡記」（八月十六日～同月十九日）に付されていた前書きとを比べ、次のように述べている。

⑤「逃亡記」（八月十六日～同月十九日を指す―横山注）が、①（一）「逃げて行く記録」を指す―横山注」とともに「文学少年」という言い方をし、「寿永二年七月」云々という書き出しを持たないことから、⑤の執筆時期は①に近く、①と同様に同人誌に発表され、ほとんど手を加えることなく⑤として「作品」に発表されたと思われる。

（『さかんなみ軍記』の改稿過程』『文学史の中の井伏鱒二と太宰治』文学教育研究者集団1977・4・15）

わたくしは、⑤の執筆時期は、①の発表時期（執筆時期ではない）に近かったであろうと思う。①の執筆時期はすでに触れたように、昭和五年から三、四年さかのぼった頃であったとみられる。この二作品の前書きの部分を比べてみると、鈴木氏の指摘したごとく、両者は多くの共通点を持っている。それはこの二作品が同時期に発表された証拠の一つだと言えるだろう。しかし執筆時期には三、四年の隔たりがあったのではないか。本文の内容について比較してみると、主人公（作者）のものをみる眼は、（一）と（田）とは大きく変化してきているのである。それについて述べよう。

田「逃亡記」（八月十六日～同月十九日）でまず気づくことは、八月十八日の宇治大納言についての描写である。これは「逃げて行く記録」に見られたような状況の説明としての人物描写、あるいは滅びの哀感といった、主人公の心情で覆われてしまうような人物描写ではない。大納言は次のように描かれている。

……私は一本の濯木のかげに宇治大納言が休息してゐられるのを見つけた。大納言は年老いたる功臣である。

彼はそこに足をなげ出して坐り、何かしきりに咀嚼してゐるところであつた。白い頰鬚は随分きたなくよごれ、頰が動くにしがたがって頰鬚が動いた。（略）老人は私にもそこへ足をなげ出して坐れと言つて、それから次のやうに話した。

——私はもう暫くしか生きてゐない老人であるが、どうしてこんなに生きてゐたいのか自分でもわからない。この疑問に答へる人間は一人もないであらう。私達は何処の場所へ逃げて行くのか誰も知つてゐない。

「頰が動くにしたがって頰鬚が動いた」という対象を突き放した描写は、人間の生に対するどうしようもない執着心をよく表している。ここには滅びの哀感をうたうこととは異質の、人間存在を直視する者の眼がある。これ以降、主情的詠嘆的な文章はかげをひそめる。

梨の木の下に立つ黒い瞳の少女との出会いは次のように描かれている。

梨の實は私の乗馬の首や鞍の上に落ち、かたい地面に降りそそいだ。水つぼくて固い果實が土地を打つ音（音）をたてた。何といふ爽やかな音であらう。私は竹竿ではげしく木の枝をたたいた。梨の實は少女の足もとに一せいに降りそそいだ。けれど彼女は恐怖のために目をつむり、梨の實が彼女の肩を打つても身動きもしなかった。

（八月十九日）

ここでは時間は止まっている。この文章は何ごとかについて物語る文章ではない。また自らの感情を叙する文章でもない。これはやはり対象を直視する文章である。直視することによって現実が現れ、少女の瑞穂しきは映える。

これが第一部「逃げて行く記録」と第二部「逃亡記」との大きな違いである。次に覚丹という人物について述べたい。泉寺の覚丹という人物が登場するのは「逃亡記」の最後の日、八月二十二日である。この人物については次のような指摘がある。

ことに教養と実行力を備へた一種のニヒリストである覚丹は、御曹子とは別

の意味で氏の理想であり、英雄を斥けることを原則とした氏の戦前の作品のなかで、唯一の例外をなす人物です。

〔井伏鱒二論〕中村光夫『文学界』昭和三年十、十一月号『井伏鱒二・深沢七郎』有精堂所収

……先を予見しつつも敗北の側に身を横たえる覚丹のような人物……

〔井伏鱒二論〕松本鶴雄 前出

……時勢の趨勢を認識しながら、意識して滅亡の陣営に身を置く傲慢を正当化するために「寿永記」の著述を企てる泉寺の覚丹……

〔井伏鱒二の文学〕大越嘉七 法政大学出版局1980・9

彼（主人公―横山注）の精神の父とも言ふべき覚丹。この大器量人は、自己の倦怠感をほとんど全く言動にあらわすことのない、しかも倦怠の人です。

〔井伏鱒二〕熊谷孝 鳩の森書房1978・7

この僧兵は作者によってひそかに「平家物語」の作者に擬せられているらしく思えるが、時勢を見通して動じないその頼もしさは乱世を生きる井伏の理想像であるかのようだ。

〔井伏鱒二〕さざなみ軍記論 東郷克美「前出」

いずれも重要な指摘がなされている。しかし、覚丹という人物が右に指摘されたような輪郭をもって浮かび上がってくるのは、「西海日記」（昭和十二年六月）以降のことである。昭和六年八月に発表された「逃亡記」八月二十二日の場面では、覚丹像はまだ明確であるとは言いがたい。八月二十二日では覚丹は、「彼は軍事ならびに学問の達者であつて、また儀礼にも通暁してゐる。かつて彼は勸学院の無類の秀才であつたといふことである」と説明されている。彼は敵情視察に出かけると言いながら、娼婦たちの集まる家で具足をつけたまま胡坐をかき、平然と飲食をする人物でもある。つまり、文武ともに秀出た豪傑として設定されている。しかし具体的に彼の人となりやうかがわせる箇所は少ない。次の文章はそういう少ない箇所の中のひとつである。

——われ等は甚だ手間どつた。或る民家に於て、われ等はわれわれ一門の女子二名に遭遇した。われわれ一門が一夜この地に宿営した際、くだんの女子二名は脱走して娼婦となつてゐたものである。すでに何ものも言ふべきこととはない。

覚丹のこの報告は、若き公達にとっては「腫を射ぬかれたよりも打撃」であつた。だが覚丹は、「すでに何ものも言ふべきこととはない」と言うだけである。こ

の一言は、この人物の、人間の連命に対する思いの深さというものをよく表している。だが、彼の人となりについてはこれ以上のことは分からない。昭和六年の段階では、この人物の構想にまだ不十分なところがあつたといふべきであろう。なお、右の覚丹の報告のことばは、「逃亡記」（『作品』昭和六年八月号）初出稿では次のようなものであつた。

われ等は甚だ手間どつた。或る民家に於て、われ等はわれわれ一門の高貴な人の女子二名に遭遇した。彼女たちは、それこそ非難に値するであろう珍らしい服装をしていた。所詮この海浜の土民たちやわれわれの敵兵は、彼女たちこの服装をも好むであらう。

この文章が現在の筑摩書房全集本に近い形に書き改められたのは、『逃亡記』（改造社昭和九年四月刊）に収められたときである。「逃亡記」初出稿にみられる覚丹のことばは、「不敵なつらだましいの僧兵」のことばとしてふさわしいものとは言いがたい。この改稿の過程は、覚丹像の深化であるとともに井伏の成長の歴史でもあつたと言えるであらう。

六

自分の主情で世界を覆いつくし嘆息するばかりであつた主人公は、第二部になると現実を直視し、そこに生きて在る人間の姿を発見できるまでに至つた。第三部ではどうか。

六年間の中絶の後、昭和十二年六月から昭和十三年四月にかけて、「西海日記」「早春日記」が発表される。「西海日記」九月二十六日夜の項は、主人公が再び室の津の少女の家を訪れる場面である。

けふ、私は彼女の家の庭さきき暫く立つてゐた。しかしまだ夕方にもならないのに、入口の戸が固くとざされて人のある気配が見えなかつた。庭の梨の枝は随所に手荒く折りとられて枯枝になり、地面には腐れた果實が幾つも落ちてゐた。この家はあばら家になつたと告げてゐるかのやうな有様であつた。私は衝動的に彼女の行方を尋ねたいと思つたが、それも断念しなくてはいけないことに気がついた。私の従卒は裏口にまはりまた表に駆け出して来て、さうして枝の折れた梨の木と私の顔を見くらべてゐた。それは私たち一族の習慣として、さういう場面に私たちが必ず拙い一首を詠みあげるのを従卒は心得てゐたからである。私は歌など朗詠しなかつた。

おそらく第一部でなら、主人公の嘆息と悲哀の感慨で充たされたであらうこの

場面を、作者は「歌など朗詠しなかつた」ということばで打ち切っている。こういう主人公の、人今を受け入れ、今を生きるVという姿勢は、次のような箇所ではっきりとその意味を現す。

すでに東天は白み、濱の御所の廢墟や福原の旧道には朝靄が立ちこめてゐた。やがて岡の麓の朝靄のなかに、薙刀を杖にしてのつしのつしと歩いて来る覚丹の姿がぼんやり現はれた。私はきまり悪いのを忘れて軍扇を高く打ち振つた。小太郎も軍扇を高くさしあげて「ウッフィー、ウッフィー」と、わが水軍の方式で鬨をあげた。時ならぬこの鬨の声は、覚丹でなく浜の御所の陣にゐた兵卒たちの反響を呼び起した。その方角の靄の底から「ウッフィー、ウッフィー」と呼應する声が起つた。つづいて壹の御所や二階の棧敷殿の焼跡の方角でも、それに應じる声がきこえた。(略)私と小太郎は岡を駆けおりて靄のなかに身を沈め、さうして覚丹といつしよに宿所に帰つて来た。

(二月五日)

一旦は陣營を脱走した覚丹が再び帰營する場面である。ここでは滅びの哀感は全くかげをひそめ鬨の声がこだまする。平家の運命はどのようにも交わつてはいないのだが、「私」は今、この場所で喜びの声をあげることもできる。「私」は今、ある余裕を持って運命に対処できる。こういう主人公の成長は、帝都における平氏の末路と源九郎の動静について語るその語り口にもよく現れている。

もし平家の首を大路に渡されなかつたら、今後この源九郎は何の勇あつて朝敵を誅することが出来ようかと申し述べた。関白院は御気色ことに不快の御様子を示されたが、法皇は源九郎の請問を許容あらせられた。十三日には、平家の首を六條室町の源九郎の第に集めて六條河原に渡し、仲頼といふもの等はこれを長刀の先に貫き赤札をつけて姓名を記し、大路をひきまはし獄門にかけた。見物の庶民はその数幾萬とも知れなかつたといふ。

(二月二十一日)

ここにはどのような感慨も入りこんではいない。源九郎と法皇の世界も平家一門の滅亡も、もはや「私」のむこうの世界での出来事である。「私」は今、私自身身の人生を懸命に生きるだけである。これが第三部での主人公の成長である。

覚丹について述べたい。この人物の特徴としてまず指摘できることは、時勢を正確に見通すことのできる眼を持っているということである。彼は戦闘の局面を見通すだけでなく、天下の趨勢をも見抜く。

覚丹の説にしたがへば、法皇の院宣はおそらく乾坤一擲をねらつている鎌倉の源氏がお受けする。さうして源氏の同族が相争ひ、近い将来にこの世の生地獄を出現して見せる。

(九月二十六日)

覚丹は私たち一門の亡びて行くのは止むを得ぬ時勢の流れであると断定し、入道相國の専横は未完成の武家政治の姿であつたと言つてゐる。そして来るべき完成された武家政治は、源九郎の手によつて確立されるだらうと言つてゐる。

(二月二十日)

歴史はまさに覚丹の見抜いた通りに進行する。ここで注意したいのは覚丹という人物を造り出した作者の意図についてである。覚丹はかなり意識的に構築された人物ではなからうか。「逃亡記」八月二十二日の場面では文武に秀出た豪傑という程度にしか描かれていなかったこの人物像は、「西海日記」「早春日記」になるとその輪郭をはつきりと現す。彼は世界を誤らず解釈できる知識と能力を持つと同時に、どのような状況の中でも生き生きと行動できる力を持つ。いわば実践力と論理力とを兼ね備えた優秀な知識人である。平家一門が大宰府を追われたという報告に「涙をこぼすまいと努め」ている「私」をいたわりながら、覚丹は「これより直ちに神速をもつて出陣すべきだ」「手後れになつては内海の制海権を得る機会を失つてしまふ」と進言する。いかなる状況においても的確な判断を下し、すみやかに行動に移ることのできるこの知識人の姿は、昭和初年というまことに生きにくい時代を生き抜いてきた知識人井伏の、あり得べき姿であつたと言えるかもしれない。

こういう人物の造形が可能になつたのは、昭和六年「川」という作品が書かれたことと無縁ではない。「川」では作者の眼は鳥となり、流域に繰り広げられる様々の人生を俯瞰する。定められた人生の中で、あるものは屈託し、あるものは憤慨しあるものは自らの命を断つ。生きるとはどのようなにも逃れようのないこの人生という枠の中で、右し左することではないのか。これが「川」を書いた作家の思想であつたと思われる。こういう行き詰まりの人生観からどのようにして脱するか。

佐伯彰一は次のように言う。

『山椒魚』から『川』と『さざなみ軍記』へという歩みは、そのまま自己幽閉という個人レベルの鎖国から、思い切つた自己解放の開国へという変化

に通じている。

(「井伏鱒二の逆説」『新潮』昭和五十年三月号)
佐伯氏の言うごとく、「さざなみ軍記」は、昭和初年に井伏が抱え込んだ屈託という思想からの解放の書であった。行き詰まりの人生観から脱出する論理はどこにあるか。それが覚丹である。覚丹は、現実の動かし難いことを充分に知りながら決して嘆息したり噎り泣いたり洩に身を投げたりすることなく、今ある人生を自由に生き抜こうとする。彼は人生を俯瞰すると同時に人生を生きる。覚丹とは作者が自己解放の論理を託した人物であり、少年とは現実の中を自由に生き抜く作者の肉体(感性)である。

平家の少年の日記は寿永三年三月四日を最後に中断している。現実を生き抜く論理と肉体を獲得してしまつた作者にとって、もはや日記を書き継ぐ必要は無い。「さざなみ軍記」九年余の井伏鱒二の歩みとは、「岩屋」の中に閉じ込められた山椒魚が、「岩屋」の中にもまた自由な人生のあることを発見してゆく過程であつたと言えるのではあるまいか。

(一九八一・九)

注1、三で触れているが、実際に執筆されたのは昭和一、二年頃だと思われる

注2、『井伏鱒二論』松本鶴雄 冬樹社昭和五三年三月刊

注3、この表は東郷克美氏の「井伏鱒二『さざなみ軍記』論」に基づく。但し次の箇所の問題があると思われる。それは「(一)逃げて行く記録」(寿永二年七月十五日〜同月二十七日傍線+横山)となつてゐることである。

東郷氏の表は加美安氏の調査結果に基づいてゐるが、加美氏は次のように書いている。「寿永二年七月十五日から同年七月二十七日までの平家一門都落ち前後を描いた部分は、昭和五年七月刊行の小説集『なつかしき現実』(改造社版)に「逃げて行く記録」という題名で収録されているが、その初出雑誌は未だ確認されていない」(『さざなみ軍記』ノート+傍線+横山)。

『文学』第六号(昭和五年三月一日)に発表された「逃げて行く記録」では、日付けは、寿永二年七月十五日から七月二十八日までとなつてゐる。

注4、「土地を打つ音をたてた」という部分は初出稿では「土地に落ちる音をたてた」となつてゐる。概念的な表現から、今という瞬間をとらえる表

現に変わつてゐる。

注5、「『さざなみ軍記』論ノート」荒川有史『文学と教育』No.52による。